

### 30. 【略画苑【りゃくがえん】】



(刊) 大本一巻一冊  
文政六年(1823)

(江戸) 蕙齋【けいさい】筆  
江戸 鋳形【くわがた】氏 蔵版  
彩色版

序に「余常に蕙翁か画を以て夏雲に比す。愈出て愈奇に、しかも定まれる跡なきをもつてなり。其定れる跡なきものをしめて名づけて略画といふ。既に刻行して世におこなはるゝもの若干種。今又其遺れるを拾いあつめて 略画苑といふ。人其繁きを厭はざること炎日を遮屏する蜜雲のごとし。余か夏雲を以て比するもの是非乎、書して大方の諸君にとふ。五郎作新発意識癸未抄冬(印)」と。序末に「神田沙弥」の印があるので、24『略画式』に序した神田庵小知と同人であろう。略画モノの最初から見て来た人だけに、その夏雲の見立ては全く同感というしかない。内容は十二月の年中行事の俗事を主として、終りに雑の部を置いたもの。『諺画苑』と並んで蕙齋略画モノの稀品である。